

光明第十号

様

(狂風より)

- 一、私たちは、汗と血を惜しみません。遠大の理想に向つて突進致します。
- 二、私たちは真実の愛にのみ幸福を見出して行きます。私たちは熱愛を求めます。そして又熱愛を捧げます。
- 三、私たちは国家を思います。私たちのすることは社会の幸福と、国家の発展と、自己満足のためという自覚が出发点であります。

一、居所が変わつても知らせてくれない人があります。そのために、光明が一月位迷つて帰つて来ます。お嫁に行つてそれきりの人があります。広島に出たきりの人があります。何という情ない人たちでしょう。あなたも、やがては、その人たちの仲間ではないかしら。

一、如何なる秘密も知らせて下さい。近頃(昨日)二人ほどお嫁に行くことを一人は相談し、一人は聞かせて下さいました。絶対秘密を守ります。如何なることもおきかせ下さい。

一、世の中で一番厄介な者は、いらぬ事をしゃべつて歩く女です。女の人は、言わなくてもよいこと、他人の小言、御機嫌取りを言つて歩かないことになさい。

一、世の中で一番卑しい者は、他人の甘心を買うことにつとめて、蛆虫の様な人間どもに好かれて行こうとする人です。

一、世の中で一番悪むべきは、自分の地位や財産を利用して、偏狭な自分の意見を通して行つて、世の中を思わないで自分ばかり驕る奴です。
(十月九日)

巻頭の叫び

一、我は人である。人なるが故に恩を知れ。人として生き得る恩を知れ。我がありと認める全ての物は、我が人として生き得るためには無くてはならぬものである。一木といえども一石といえども我が目にありと認め我が耳にありと聞き、我が鼻にありと嗅ぎ、我が口にありと味わい、我が手にありと触るるものは、皆我がために存在するものである。かかる一切の物は我をおいて、我をのぞいては存在するものでない。

この無量の我のために存在するものに対して感ずる恩、その恩を知ることが即ち我が宗教生活の第一歩である。

忘恩は社会的生活の破滅である。恩を忘るるものは、人生より社会より葬り去らるる最初の人である。古来歴史上における幾多の美談は恩を感じた者の生活である。恩を思わない生活は禽獣の生活である。自分得手勝手の生活である。自分得手勝手な利己的生活は一時の成功はあつても、永遠の勝利でない。恩に包まれたる自己の生活に深い感謝の涙をそそぎ、我もまた他の全てにむかつて、慈愛と救済と、正義の味方とによつて恩に報い、恩を与えるならばそれこそ永遠に栄える生活である。恩を知るなれば我が幸福は永遠に尽きず、人は皆我が味方である。恩を施すなれば、我が幸福は永遠に尽きず、人は皆我が擁護者である。国家の恩、君の恩、親の恩は言うまでもない。全ての生物の恩、全ての人の恩、我、人として生き得る全てのものの恩を知れ。

二、人生起きて半畳、寝て一畳、食うところ三椀あれば事は足る。その体強健にして、食う物に事欠かず働き得るものは、その不幸を歎いてはならない。歎く余裕があるなれば、今一層努力せよ。分を知らずしておごり、濫りに財貨を費やして、而して後不平に陥るものは、共に語るに足らない。少きに安んじて努力せよ。

努力的生活(一)

2

一、自我の活動

我々は日常何を目的とし、何の命令により、如何なる意味で種々なことをしているのでしょうか。何のために生きているのでしょうか、難しい問題であります。

昔、ギリシャのアリスチッポスは、

「人は皆快樂を求め苦痛をいやがるものである。快樂は人生の目的である。快樂は、唯理由もなく、快樂だから善である、故に、如何なる快樂でもそれを悪いというのはいまちがつている。今から先の快樂や、過去の快樂は目的ではない。ただ目の前の快樂が目的である。」と言っています。

快樂説と言つたり、個人主義、利那主義、自利説というのが即ちこの思想であります。彼が言つた様に、人生の目的は快樂を得ることでしょうか、誰も皆彼の思想のまちがつていることを知るでしょう。しかしながら、今日の世に快樂をあたかも人生の目的かのように、常に快樂にのみ心を使つている人はいないでしょうか。目の前、即ち今だけ愉快だったら好むという利那主義の人はいないでしょうか。他人はどんなでもよい、自分さえ今楽しかったら好むという個人主義の人はいないでしょうか。妻や子は仕事に疲れ、飢に泣いてもかまわずに、濁つた酒や女や快樂を事としたり、他人には迷惑をかけ損をかけても自分だけ、金の中で楽しがつている者はないでしょうか。

僕の村に旧家で財産家があつた。その家に、放蕩息子が生れて来た。とうとう、身代を酒にしてのんでしまった。その男がある時その家の縁に立つて、「あの村一等の

田一枚を一晚に飲んだ事もあるが」と昔を思いかえしたという話を父が僕にきかせたことがある。快樂、自分の楽しみに生きた男である。まちがつている。世の多くの人の行く道はまちがつている。

宇宙の全ての物は活動しています。一切皆動いています。種々に働いていますけれども。その働き方を三通りにすることが出来ます。まず第一は無意識的活動であります。山から石がまぐれたり、水が低い方に流れたり、人が寝言を言ったり、寝ていて、側の人をたたいたりすることなどは皆これであります。第二は意識的活動であります。自分で知っていてする活動であります。私たちは今呼吸をしている、瞬きをしています。そして、それらは知っていて行っています。これらは意識的活動であります。第三は、有意的活動であります。例えて言うると、今私はお腹がすいて来ます。お腹がへつて、辛いと思います。何か食べたいと思います。菓子を買って食べようか。飯をたいて食べようか。隣の家で食べさせてもらおうか。人の弁当を取って食べようか、色々と欲望がおきて来ます。どれかに決めなければなりません。その時私には意志という心の働きのあつて、意志は、飯をたいて食べよと、申します。そして、それを実行します。ここに飯をたいて食うという活動がおきて来ます、こんな活動を有意的活動と申します。

以上三種の活動の内では有意的活動のみが意義ある活動であつて、この活動に対してだけ、我々は、道徳的責任を負わなくてはなりません。私たちが毎日している行いは皆この有意的活動であります。有意的活動は、自分の心で自分が勝手にきめて、自由に行う行動であります。私たちがしている毎日の行いに対しては、皆責任を負わなくてはなりません。

あなたが道を歩いていきますと、その前を歩いている人が財布を落しました。あなたはそれを拾つて見ます。中には、たくさん金が入っているらしい。その時あなたは、その財布を何とします。知らない顔して懐に入れますか。そのまま捨てておきますか。拾つて警察にとぐけますか。あるいは又その人を呼びかえして返しますか。この場合少くとも四通りの仕方があります。何方なりとすることが出来ます。

あなたは言下に答えるでしょう。「それは、迫いかけて返して上げます」と。しかしながら現在の世の中には、立派な人ばかりの集りではありません。他人の山との境をせつて、無理を言つて取る様な人もあります。落したものではありません、人の持つているのを取る人もあります。前の様に、全ての人が皆その金を持つて行つて、返す様でしたら、世の中には道徳等もういらなくなります。法律も裁判も用事はありません。人が見ないのを幸い、そつと懐に入れる人はいないでしょうか。こんな場合に、人は必ず、何方にしようかと、考えて見るでしょう。あるいは思うでしょう。これだけの金があれば、着物も買える何にもされる。そして又いやいや取つてはならない、他人のものを取れば罪人である、取つてはならぬ。その他色々な考えが浮んで来ます。

しかしながら、心の奥の奥に声あり、何と教えるでしょう。「汝は正直でなければならぬ、人のものを取つてはならぬ。他人の物を取る者は、道徳上悪いばかりではない。法律上の罪人である。その上汝は人には親切でなければならぬ。落した人は困るでしょう。早く、走つて行つて返しなさい」と厳しく言いつけるでしょう。かく言

うものは何でしょう。それこそは、自我であります。我であります。我が我に、言いつけるのです。自我が良心という最も神聖なる厳格なる形を取って、明らかにあなたの行くべき道を示したのです。

この叫び、この命令こそは、真のあなた即ち真我の光であります。その時決して、良心は、その金を取って、楽しめとは言いつけないでしょう。もし、あなたがその命令に背いて、それ以外の方法を取ったならば、即ちその金を取ったならば、直に、良心は、裁判官になり、警官となり、獄吏となつて、如何に我と我に向つて言い訳しても、忘れようとしても、その厳しい試みや、苦しい罰を免れることは出来ないでしょう。我は「あなたよ、あなたは自我に忠実なれ、真我の命令は死んでも守れ。自我の光をかくすな」と申します。(自我とか、真我とか我とかいうのは、あなたの心全体のことです。)

自我に忠実な生活。自我の命令(良心の命令)にすなおな生活を向上的生活。自我にそむいて、自分の心の一部分(部分我)の快樂に従つて行く生活を私は墮落的生活と申します。

向上的生活を続けて行くことを又努力的生活と申します。(つゞく)

我は如何なるものぞ (二)

(1)死

「我は不可思議なるものだ。」「我は小さき者だ。」と申しました。しかし私は、死について書かなければなりません。死ぬるということは誰も考えたくない問題でありませぬ。言いたくない事でもあります。けれども私たちは生まれ出たという原因があるからには、死ぬるという結果に遭わなければなりません。生きることを享樂する者は皆であります。美しい家の中で山海の珍味をならべ、盃につがれた酒の味に人生の快樂に酔う人もあります。何千万の財産を持つて、出づる自動車、入れば美衣美食、世の物的生活に何不足のない人もあります。ああ、しかし、死の運命は如何なる富者も貴者も一味もれなく人生から取り去らなければおきませぬ。僕らの友人で、鉄骨と自分で言つていた強い男も、弱い僕より先に死にました。死んではならん叔父も死にました。かくして、全ての生きとし生ける者は皆今からすぐでも死ななければなりません。死から見た我は朝の露よりもはかないものであります。

一人の旅人がありました。広い草原を歩いていきますと、にわかには怒り狂つた虎が旅人人目がけて走つて来ました。旅人は虎の餌となることを恐れて、そこにあつた空井戸の中に入りました。やれ安心と思つても無く、その井戸の底には大きな蛇が口をはり目を光らしているのを見ました。旅人は上に出ることも出来ませぬ、それとて下におりることも出来ませぬ、井戸の内側から出ている一本の木につかまつていました。彼は、もう如何ともすることほ出来ませぬ。ただ一本の木が命の杖でありました。しかし、そこへ、自と黒の二匹の鼠がその木の上に来てのを見ます、そして、自と黒とわかるがわるその木を噛つています。何と危いことでしょう。今にも旅人は落ちなければなりません。旅人は落ちなければならぬことを知っています。それでも木につかまつて、ずつています。そして、その木の葉の上についている蜜を舌をのばしてなめています……

これは仏説譬喻經に出てのお譬であります。死より見たる我が生命はかくの如くはかなきものであります。我が身の上に死の魔の手が伸びて来ることは、三十年先でしょうか、十年先でしょうか。来年でしょうか、来月でしょうか。明日でしょうか。一時間さきでしょうか。私の生命に対しては、何時来るとも言うことも出来ませぬ。

「四十二章經」に曰く、

仏問沙門「人命在幾時」対曰「数日間」 仏曰「子未知道」

問一沙門「人命在幾時」対曰「飯食間」 仏曰「子未知道」

問一沙門「人命在幾時」対曰「呼吸間」 仏曰「善哉子知道」

(釈迦が一人の僧に「人の命は幾時の間あるか」と問いますと、「数日の間」と言いました、聞いた釈迦は「なんじは未道まだを知らない。」と言いました。他の一人は「飯を食う間くらいのものです。」と言いました。釈迦は「なんじはまだ道を知らない。」と言います。第三の沙門は、「ただ一呼吸の間です。」と。釈迦は「ああそうだそうだ、なんじは道を知っている。」と申しました。

ふき出した息は再びかへつてほ警せん。そして又その次が出て来なかつたら、即ち死であります。私たちは「死生命あり論ずるに足らず。」とか、「死を見ること帰するが如し。」とか言いますけれども、私は死にたくありません。死は恐しうあります。どうしても生きなければなりません。誰が何と言つても生きなければなりません、それが人間です。よく見るではありませんか。病のために身の自由はきけない、そしてもう五六十と年をとつた老人が、身には見るかげもないぼろをつけ、路傍に坐つて道ゆく人の情にすがつていゝるではありませんか。かくしてまでも生きなければなりません。多くの人はただ生きんがためにつとめていゝる。人である以上「生の執着」のないものはありません。

私は『歎異抄』を常に読んでいます。第九節に、親鸞とその弟子唯円房との問答があります。

「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによりこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。また浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫よりいまままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩惱の興盛にそうろうにこそ。なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあわれみたまうなり。」

没我的絶対他力を説き、永世に聖寂に帰した親鸞すら、「生の執着」「死の寂寞」を言つていゝるではありませんか。我唯一人死の岸頭に立つたとき。そこに、寂み恐れ以外に何がありましよう。如何に世は文明になり、この世が悦樂の都と變つても、煌々と電燈の照る、自動車の走る、町の裏には、青白く月の照る墳墓に、冷たき石と、しめやかな香の煙の立つていゝることを忘れてはなりません。

私たちは死を考えなくてもいいでしょうか。現実の享樂に酔うて、いたずらに年老いてよいでしょうか。花は美しい、しかし散らなければなりません。花のみを見て樂しまんとする人は、花の色のおせはてて木枯しの吹くとき如何にして生きんとするのでしょうか。私たちは永遠に若くはありません。綺羅を飾り、紅白粉の装いもやがて昔の夢であつたと年ふけた時、花が人生と思つた人に何の寂しさも物足りなさもないでしょうか。私たちは死を考えなければなりません。そして死の考えに徹底した時、人生の眞の生活に入り、眞の人生に憧れねばなりません。

楞牛全集卷ノ四の初めに、「死と永生」と書いてあります。

「死は生きとし生けるものの免るべからざる運命なり。夫唯免るべからざる運命なり。故に又避くべからざる問題なり。されど生を惜しむ人はあれども死を惜しむ人は少なく、生について慮る人はあれども死に就いて考ふる人は稀なり。いぶかしからずや。如何にして生くべきか、是人生の大なる疑問なり。然れども如何にして、死すべきかは更に大いなる疑問にはあらざるべきか。吾等は歴史をよみて、大いなる宗教の起るを見たり。されど宗教とは、生きんがための教にあらずして、死せんがための悟なり。釈迦は人生の四苦に感じて、解脱の途を説きぬ。耶穌は同胞の宿罪を贖うて永生の道を開きぬ。解脱や永生や、死を外にして何の意義がある。最も賢き人の説ける哲学の旨趣も亦是に外ならざるなり。……中略……あれ、其生を見て、其死を見ざるものは、人生の根本を忘れたり。死はすべての物の終りにして、又すべての物の初めなればなり。されば人々の死を考えよ。死を考ふるは即ち人世の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは死滅を考ふるにあらずして、永生を考ふるなり。死は人生の究竟なるが故に、永世は人生の目的なり。……略。」

死を考え、死を惜しむことは永生を考えることであります。現実を人として生きる我々には、我々の身体をはなれて生命も何もありません。死は「人」としての我の破壊であり滅亡でありますけれども、人間としての我々の死は、永生(未来永劫死なないこと)に生きるその誕生でなければなりません。生をはなれて、道徳も学問も無い様に、死をはなれて、自覚も道徳も宗教もありません。生きるということの後には必ず死という問題がありとすれば、生きんとつとむることは、やがて死せんがための努力でなくてはなりません。

死について考ふるとは、いたずらに死を悲しむことではありません。死について自覚することです、救われることであります、永遠に生きんがために、死を超越することです。私たちは、生きんとつとめます、そして、その生活は死を考えることによつて、その意義と、価値を得なければなりません。如何にうれしい時にも、華やかな時にも、死を考えたい。死ということを知つてこそ、真に、我々は、現実を忠実に、自分の心に真面目に生きなくてはならぬ自覚と努力とが得られるのではありますまいか。

囚人の叫び

何という悲しい言葉でしょう。「囚人の叫び！」けれども私の目覚めてくれという叫びは、昔の聖者たちの様に、身も心も浄化されて、曇りなき神聖な心に湧き出した神のみ告ではなくて、汚れたる者、罪を犯せる者が、罪から来る罰を生れたままの正しい心で受けながら、その罪に対する一切の責任を負って行こう、その恐しい報いからのがれようとすまいという、悲しい、しかし根強い、寂しいけれども、感謝の生活、その私自身に与えられた救いです。救いからわき上る叫びです。

そうです。救い、感謝、そして告白、それが私の叫びです。私に何で人の道を啓示することが出来ましようぞ。「俺は今悪人の全てが行くべき地獄に行っている。世の同胞たちよ、私の様になるな。」私は囚人の叫びだと申します。

私が目覚めてくれの叫びは、女神の言葉の様に神聖でもない。美しいものでもない。けれども、私の塞が戦きふるひ、荒れ狂い、恐れ悲しみ、悩みもだえた末に来た霊の平和光明から出て来た事実です。私の人生に、暴風雨の様な破壊の後に来た平和です。静けさです。霊の実感です。

怠惰者はその怠惰た罪を負うたがよい。無慈悲な者は、無慈悲な罪を負うたがよい。それを避けようとするから迷うのだ。救われないので。私は私の罪を忠実に負って行かねばなりません。地獄があるなら行きましよう。たった一人なら一人でもよい。

人が信じてくれないなら、それでもよい。一人孤独を味わって行こう。人々よ、私8の悪を裁いてくれ。冷く罵ってくれ。私は今、それを忠実に受けようとしている。もつともつと、悪く言ってくれ。たとえ悪くなくてもいい。私を攻撃してくれ。私の親切をつくしてやった人間も、・・・恩を受けた人間も、私が恩をきせた人はないが、形の上から見て・・・教え子も私を裏切って、砂を後足で蹴りかけて、さつさつと逃げてくれ。私は今それを待っている。それも私にとっては、なくてはならぬことだ。私の苦しみ、そうだ、そんな度に、私は苦しむだろう。けれどもその苦しみ、その暗がりをじつと見つめて、その中に、私のたった一人の世界を見出される。私にとっては、これさえ感謝の一つなのだ。

罪に服した者の平和感謝、それは私のもっている幸福の全体です。私の叫びは、そのどん底から湧いて来る。

私は七歳の夏死が悲しかった。毎晩の様に泣いた。そして、苦しまないで仏の子となった。信心深き父と母とによって。今考えても涙ぐましいほど懐しい仏の子の生活が続けた。村人は、神童だと言った。若死する子だと言った。道を歩く時、必ず仏への花をもち、口には念仏の声がたえなかつた。けれども、私の霊が偶像から開放され、人間として目覚めかけた時、十有余年間の仏は煙の様に消えた。言い様のない寂しさが続いた。

その後の私は、深い精進の私ではなくて、私の行いたいままを行つた。燃える様な狂ふ様な内部からの欲求のまにまに、二年間の月日は去つた。けれどもとうとう私も私を再び静かに見ねばならぬ時が来た。私ほじつと私の霊を見つめた。そして、熱

涙の幾月は続いた。頭に浮ぶものは何「私は忠実まじめに生きねばならぬ！」私には、罪の裁きを受ける時が来た。内的革命に急ぐ時が来た。二年の月日は去った。そして、私は、私の内に、醜い私の内を、いつはりおおせなかつた。失なつてしまわれぬ、一物を見た。私は救われる外なかつたのだ。私は暴風の様な過去に於て、又と二度得られないものを得て来た。

私たちは人を信じようとしませぬ。けれども信じている者も、間もない内に裏切つてしまう。私を売つてしまふ。裏切つた者を悪まないまでには、如何に、苦しい時が続いた事でしょう。

本日もある人が私を売つて、私の友人に私を傷つけてくれたがために、私の友人が怒つて、六尺もある長い手紙に、私の全てについて、有ること無いことを書きつらね、私の不親切を責めて来たのを受け取りました。私はすぐペンを取つて、用紙十枚感謝にむせぶ胸の内を書いて送りました。多くの人間は、人のしたことの理由もきかず、背景も見ず、自分勝手な判断して、陰でこそ言え、面と向かつて言つてくれる人もないのに、私は、この友人の純な気性にいよいよ深く感じました。

「〇〇からも、先生に関する色々な噂や、悪いことの全てを聞きました。〇〇さんでさえ先生に対しては、むしろ悪意の方と思う。そうだ、先生が信じている彼でさえ、全てを裏切つたと思います。」などと、他人の中傷までしてありました。

私は「私を裏切り、私の悪を裁き、私についての世の誤解をそれらの人と共に言つてくれる人のために、最後まで尽くしてあげることにも私に取つては有難いことです。私は今もそんなことを待っています。『人々よ、もつともつと私を悪く見てください。もつともつと誤解してください。そしてもつともつと悪罵し、鞭打つてください』と私の心は申します。全てが私には感謝です。」と言つておきました。

けれどもその終りには、「私の様に孤独な人間には、私の周囲の一人でも失ないたくない。私たちは、如何なる人の中傷も策略も私たちの間を破ることが出来なかつたことを喜びつつ、一緒に夕食を取ることを天は免すでしょうか。」と書いておきました。やはり人間です。一話は枝道にそれた。

囚人の叫び！ 同胞よ、兄弟たちかもしれ清いもの美しいもの、そして、あなたの靈をなでさする様なねんねこ歌の様なものを得たいなら、あなたは、そこら中に一杯いられるお大徳や学者の前に行つた方がよい。甘い物がほしければ、俗悪小説や酒と女と狂乱の巷に走れ。悲痛な囚人の叫びは、救われた歓喜なのだ。囚人ということにあなただけが傷つけられるならば、小さい義理立てをやめて、逃げてくれ。私は、その度毎に、悲痛な幸福を感じて行こう。(十月十日 夜)

あれあれ鐘がなる！ 鐘がなる！

□あれ、あれ、鐘がなる！
鐘がなる！

人よ目覚めよ、の鐘がなる。
世界中に鳴り渡る鐘の音よ。
私はうれしい。

求める者には、それが明らかに聞えるから。

人々よ、あの鐘の音をきけ。

久遠の昔から響く、あの鐘の音を。

今こそ、人々よ、私たちの周りに掘られた、虚偽と、怠惰と、卑怯との溝渠と、私たちの周りに築かれた因襲と妥協と陥穽と争闘との城廓を棄てて、真実の自分になろう。そんなものから開放されて、私自身にかえったとき、私たちは、すぐ愛によつて結合される。

矛盾に充ちた現実には、老いてしまった人生に、私たちの持つべきものは真実の私自身より外ない。私自身の愛しかない。

利己の世の中、策略の今の世の中、私たちは、私を忘れた時、その中に引きこまれる。私自身の内を見て、私の内に育てて行け。

万人の賞讃も、自分の心が賞讃せなんだら、何にもならない。

万人の誤解や非難も、私一人が信じたら、問題ではない。

私の内にかえれ。

おお、それ、鐘がなる。

鐘がなる。

信仰だ。信仰だ。

私自身を見つめることだ。

□夏の暑い真つ最中、体の強くもない私は、友人が泊まれというのもきかず、乗物にも乗らないで、五日間、飯室から可部に通つて見た。暑いのがうれしかった。毎日可部を一時にたつて、三時四時飯室にかえった。道端にころがっている種々の教訓を見出すこともうれしかった。

ある人に出会つた。私の通勤を見たその人は、「ふん、金はたまるほど汚い。」と言つた。涙がこぼれた。悲しかった。信じられないのが悲しかったのではない。利益打算一つを自分の骨としている人間が、それを人にあてはめようとする哀れなその人が悲しかったのだ。

九月の二十四日、五日、六日は、僕の郷里の氏神祭であつた。二十四日が土曜日なので、十一年ぶりに郷里の祭に帰つた。二十五日(日曜日)、家でたった一人坐つて、子供の遊ぶのを見ていると、男が一人来た。「先生何時行きますか。明日も祭ですか

ら、明後日頃行くのでしよう。」「いや今晚方か、明朝暗い内に出ます。」「へへ…一日位はようがんすよ。」「いえいけません。」「まあその様に辛抱しなされば、月給が早くあがりますなあ。」「あきれた。あきれた。悲しかった。同胞よ、この二人の男が誤解するのみではない。人に知ってもらおうと思うな。どうせ、我利我利の世の中、得手勝手の世界の中、私が真実知られようはずがない。内に帰れ。内に帰れ。」

□ 厳密に言うならば、私たちは、あなたに対して、「嘘を言うな。」という唯一つの法則すら与えることは出来ない。

親が病気になって、命旦夕にせまった時、医者死の宣告をした。死にたくない親は医者が何と言ったか聞きたがる。今死なしたくない。「死ぬるそうです。」「何で子の口から親に言えよう。」「気をしっかりなさい。よくなります。」「それ以外に子供にあたえられた言葉があるうか。

人の悪口を人が尋ねたとき私たちは、「知らない。」それでいい。そうだ、人間はこれまで私たちの行くべき道を外にばかり見出そうとした。法則ばかり求めて、それに従えと言いつぎた。けれども、結局、私は私の真実の声に従うより外ない。

「誠は宇宙の根元だ。実在だ。そして、その誠はまた、我の本性だ。真実の我だ。その本性に従うのが人の道だ。」
と言った支那の子思も今更尊くなつかしい。

□ 理屈を言いたがる私たち人間の子、死にかかった老婆にも理屈はある。食って行けない乞食にも理屈はある。私たちの言っている理屈位あてにならないものはない。言葉の使い方や、声の調子で、嘘が誠にも、誠が嘘にもなる。私は理屈を聞くことも言うことにも飽いた。人間の求めているものは理屈ではない。理屈は灰の様なものだ。私たちは、理屈よりも、無言の温かみがほしい。

あたたかみ、それは言外の言葉だ。人間と人間との間の温味は、人間が赤裸々に結ばれた時、信じあつた時感ぜられる強い力だ。私たちが、涙の出る様なあたたかさや、奮い立つ様な犠牲的精神に燃えている自分を見出した時、私はそれが感激だと言ひたい。

人生になくてはならぬものは、理屈ではなくて、この感激だ。理屈には動かない人間でも、感激には死ぬる。人生に感激ほど力強いものがあるうか。感激をもたない人間ほど哀れな者はない。感激は、財産をも、名よをも、時には私たちのもつ全てを失わしめる。夫は妻に、妻は夫に、親は子に、子は親に、兄は妹に、妹は兄に、それら間に与えたいものは感激である。

真田幸村は絶世の軍師である。戦略家である。大阪城のおちること位は火を見るより明らかだ。理屈の上では、何で大阪城へ死に入ることが出来ようぞ。けれども幸村の太閤における感激は、秀頼に、死恥かかすことが出来ようか。落ちるを知つて入る絶世の智謀家幸村の心中、理屈で何がわかるうぞ。

結婚について

□「様口様、お二人とも返事を一月以上ものばしてまことに相済まないことです。お二人とも、「結婚をしなければならぬ身の上となった。何と考えたらよいか。」という意味のお問いです。私の様に、また独身の者がお答えするのは、間違いか知れませんが。けれども一方経験のないところに、真実を言えるかと思えます。私は大胆に私の考えを言つて見たいと思えます。

□人生に於ける結婚問題位大問題が他にありませんか。生と死、結婚、この三大事の内、生は私たちの知らないことです。死は、私たちには悲しいことです。ただ与えられた結婚は、私たちが自由に行い得る厳か問題です。そして、重大な問題です。女にしても男にしても、一生の浮沈の分るるところです。「女房の悪きは六十年の不作」と申します。女から言つても一生の幸不幸は結婚の成功か否かにあります。極めて重大な問題です。

□夫婦の間に於いて、なくてはならぬものは愛であります。清い清い恋愛であります。厳密に言うならば、もし、夫婦間に愛がないとすれば、私たちはそれを夫婦とは言わないと思えます。夫婦はただ愛によつて結合されてのみ夫婦であります。夫婦の愛の結晶は子供であります。純真な愛によつて結合された夫婦によつて生れた子ほど、恵まれた運命の人間はありません。その子の体の中には、清い人間らしい血が流れています。一国の繁栄の根本は、真に、夫婦間の恋愛の如何にあるとさえ思われます。もし夫婦の間が冷たくて、二人の間に溝があつて、その愛に濁りがあるならば、その二人の間に生れた子は、姦淫によつて生れた子です。情慾のみによつて出来た子です。二人は罪悪です。何も知らない子は、永遠に虚偽と不純と淫蕩と冷酷な血と霊を持つて進まねばなりません。夫婦間の愛の欠乏位大きな罪悪がどこにあるでしょう。重ねて申します。恋愛があつてのみ夫婦であります。

□従来我が日本では、家族制度の国ですから、何よりも血が尊ばれました。血を尊ぶということは、大切なことです。自分の血統に、優れた血を入れることはこの上もない大切なことです。ところが、優れたる血は、多くの場合、富んでおり、身分の高い家柄の正しい家に多く見出せたので、引いては、家柄を言う様になりました。そして、結婚の第一条件は家柄となつてしまつたのです。個人よりも、氏族全体の望みが重んぜられました。人物や、学問や、才能や等は、第二以下として取り扱われて来たのです。結婚する二人は、何もその男についても女についても実際は知らないで、親の命令に従つたのです。現在日本の法律では、結婚を決定する最後の権利は、結婚する二人の承諾においてあるが、なお親権者の承認がいきます。今日でも実際は、親や兄の命令によつて、知らない男のところ知らない女が行くことが大方皆の様であります。

□しかし、現在叫ばれている結婚に対する意見は、ほとんど皆が、いわゆる新しい意見であります。「恋愛即ち結婚」の説であります。雑誌や書物に出ている意見をまとめて見れば、「在来の結婚は野蛮時代の掠奪結婚だ。強制結婚だ。誘拐結婚だ。姦淫結婚だ。」と言うのにある。確かに、従来の結婚は、見方によっては、姦淫結婚です。知らない男と女を肉によつて結びつけるからです。財産や、家柄や、容貌や教育を餌に、女をかどわかす結婚です。父兄の意見には、イヤイヤながらハイと返事する強制結婚です。時には門地を高めたり、金を得たり、出世を考えたりすることのために、手段に用いられたことさえあります。

「結婚は手段ではない。人間としての生活の根元だ。知らない男と女が一緒になつて、もしその二人の理想がちがつたらなんとする。その個性が嫌であつたらどうする。趣味がちがつたらなんとする。男は人生の目的は勉強にある、精神生活にあると、理想にあこがれ、光明に進まんとするとき、妻は、金がほしい、着物がほしい、と栄華をこれ求めたならば何とする。快活な楽天的な男のところ、陰鬱な梅雨の様な女が行つたら何とする。音楽の好きな女が、一人歌をうたつたり、楽器をならしている時、『喧しい』と叱られたら何とする。

従来の結婚ほど危ないものはない。まるで籤をひく様なものだ。人間の結婚はそんなに、軽いものだろうか。故に、男女間の恋愛をもつて、結婚成立の第一条件とせよ。結婚とは、民法上の手続きではなくて、恋愛の成立がそれだ。恋愛のないところ結婚はない。」と言うのであります。

□ここに恋愛の意味を言つておかねばなりません。新しい人たちの言う恋愛とは、「男女間における人格と人格との崇高なる共鳴結合であります。男は女を尊敬し、愛護し、女は男を尊敬し、愛慕するところに、共鳴し、同情してここに、人格と人格との接触、熱烈なる愛によつて結ばれる。それが恋愛である。かかる恋愛は崇高なもので、社会浄化の源であり、道徳生活の第一歩である。」と云うのであります。真の恋愛はそれであり、私ももちろん賛成です。人生夫婦間に必然なくてはならぬことでもあります。(唯固く言うのほ、徒らなる男女の一時の遊戯心や、慾情のための野合などは、恋愛ではない。)

□日本では、「夫唱えて、婦従う。」いわゆる「夫唱婦随」というのがあります。家族制度の国に出来る美德であります。唯そこには、妻は、自分の個性を棄て、趣味を更えなければならぬ犠牲があります。女は、ただ、夫の命に之れ従うのであります。因襲の久しき、ついに女子は、体力智力において、男よりも低いものになつて来たのであります。女は卑しい者にされて来たのであります。女も卑しいつまらない者だと思ふ様になつたのです。妾になつても娼妓になつてもいとわれないほどの卑しい心まで持たす様な無自覚なものにしたのです。「女は男の道具ではない。女よ目覚めよ」の叫びが日々盛んになるのは、うれしいことだと思ひます。

□ 新しい目覚めたる結婚は今惨憺たる試練の中にあります。幾多の犠牲がはられ、旧い人からは罪悪視されて、社会の人からは嘲笑の的にさえせられて、時に幾多の悲劇を作りつつ進んでいます。さて私たちが如何なる道を行くべきか。如何なる方法がいいか。しかし、これは遺憾ながら何とも言うことが出来ません。歴史が作った道徳又は習慣は改良さるべきものであっても、それを（以下原文欠）